

## 金山明の電動機器による描画 —具体美術協会におけるその意義—

加藤 瑞穂 大阪大学総合学術博物館

戦後日本を代表する前衛美術グループとして知られる具体美術協会(1954-1972年、以下、具体)の作家たちは、結成から少なくとも1960年代半ばまで、生々しい物質感と激しい身体行為を伴う描画が特徴的な平面作品を多数発表した。中にはそれに合致しないスタイルの作家も存在した。金山明(1924-2006年)はその代表であり、素材を厚く盛り上げ、行為の痕跡としての筆触を強調することはなかった。彼が1957年以降、1965年に退会するまで用いたのは、自らの身体を激しく動かす代わりに、電動の機器を操作して描く手法であり、しかも画材は基本的に、油絵の具とは違って画面上に凹凸を生み難い合成樹脂エナメル塗料が中心であった。

発表者はこのような金山の存在を、具体の典型から外れる一事例として扱うのではなく、むしろ具体の解釈を見直す上で注目すべきだと考える。特に本発表では、金山が1957年に確立した電動機器による描画について、その前年の代表作である《足跡》やバルーンの作品からの経緯を含めて検討する。その際、具体の代表的作家の一人で、足による描画で名高い白髪一雄との比較を試みたい。金山と白髪は幼なじみで、1952年には0会結成の核となり、1955年には共に具体へ加入した。旧知の間柄の二人ではあったが、1950年代半ば以降のスタイルや制作方法は全く対照的であり、中でも金山は、白髪との対照性を意識した上で制作に取り組んでいたことが推測される。

これらの考察を通して金山作品が提起するのは、具体について語られてきた「物質」と「身体」を要とする見方の再考である。具体は、リーダー・吉原治良が「具体美術宣言」(1956年)で表明したように、「人間精神と物質とが対立したまま、握手している」状態を目指した。そして、物質自体が持つ特性を最大限生かすなど、精神に「従属」させられない物質という考え方を、戦後美術史上でいち早く言明し実践した点、その過程で身体に大きな役割を与えた点が評価されてきた。確かに白髪や嶋本昭三、村上三郎らはそれを具現した作家たちだが、彼らの代表作のみを前提として具体を理解しようとすると、グループが本来持っていた多面的な活動の意義を限定的に捉える恐れがあるだろう。

金山は自らが描かず代わりに電気を介在させることで、精神と物質との関係を更新するには、白髪らが示した身体の直接的関与以外にも選択肢があること、また目に見える物質だけでなく、それを取り巻く空間や時間の要素に目を向け、素材の物質感に訴えるばかりでない作品のあり方を提示したと言える。その志向は、1965年以降に具体で顕在化した、電動製の作品や発光する作品、それが置かれた環境ないし鑑賞者との関係を意識した作品などを複数の面で先取りしていたのである。

(かとう・みずほ)